

1992年(平成4年)3月29日(日)

## 第190回 史跡めぐり資料

玉川上水緑道(武蔵野の面影残る緑の散歩道)

小平監視所下流散策

### 玉川上水駅までの交通機関

※交通費等は当会で一括して支払う(南越谷~国分寺運賃680円、国分寺~玉川上水運賃160円)

南越谷駅前 8:30集合

南越谷駅 8:59発(階段あたりより乗車)

↓武蔵野線

西国分寺駅 9:40頃着(すぐそばの階段を降りる)

乗り換え

西国分寺駅 9:47発(階段降りた1番線ホームのやや後ろで乗車)

↓JR中央線

国分寺駅 9:52頃着(改札出口をいったん出る)

乗り換え

国分寺駅 10:14発(西武多摩湖線ホーム)

↓西武多摩湖線

一橋学園駅

青梅街道駅

はぎ ↓

萩山駅 10:22頃、1番線に着

乗り換え(同じホームの2番線側)

萩山駅 10:33発(10:29は乗らない、西武遊園地行きなので)

↓西武拝島線

小川駅

東大和市駅

↓

玉川上水駅着 10:42頃、改札出口は1番前

案内者 越谷市郷土研究会理事 加藤幸一

## 玉川上水緑道 散策コース

玉川上水駅（駅内北口の改札付近にトイレあり）

玉川上水案内板

水道局小平監視所（沈砂池）

野火止用水分岐点の案内板

上水小橋（近くに簡単なトイレあり）

小川橋そばの石橋供養塔・小川橋の案内板

寺橋そばの石碑『寺橋』

玉川上水公園（トイレあり）

雨天中断の時 朝鮮大学前バス停で『国分寺車庫行き』12:05、20、41、58

中央公園そばの玉川上水の案内板

中央公園内、小平市民総合体育館（0423-43-1611）

第2・第3会議室にて昼食

昼食後、平櫛田中について説明

その後、会費（3,000円）徴収

休憩・見学（～2:30） 館内に売店あり、近くの駅そばに食堂あり

以下は希望者のみ（1:30～2:30）

旧小川水衛所

平櫛田中館（0423-41-0098 ビデオ15分・展示物見学15分）

市民総合体育館 2:30 休憩滞在グループと田中館見学グループ合流

鷹の台駅



国分寺駅



西国分寺駅



南越谷駅（解散）

# 玉川上水



玉川上水は、三百三十四年  
前(承徳三年)の開削。羽村  
町の多摩川の取水口から四谷  
大木戸(新宿区)まで延び四  
十三キロ、流れが復活したのは  
小平監製所から杉並区久我山  
までの十八キロ間。水は昭陽市  
の多摩川上流加藤場の下流二  
次処理水をさらに砂ろ過した  
もので、一日約一萬三千トを  
放流。

木々の緑 小鳥のさえずり



## 1. 玉川上水について

玉川上水の建設者は、玉川庄右衛門<sup>しやうえもん</sup>と清右衛門<sup>せいえもん</sup>の兄弟で、江戸町奉行の委託で計画したものである。今から約330年前、承応2年（1653）に始まり、翌3年6月に完成したと記録されている。羽村<sup>はむら</sup>から四谷大木戸<sup>よつや だいもきど</sup>まで約43キロメートルの長距離を測量器（レベル）のない時代に驚くべき早さで完成させた事は当時の土木技術の水準の高さを物語っている。又、この辺一帯の新田開発には上水から分水が利用され、大発展した。

『上水の歴史』（東京都）掲示板より

玉川上水は約330年前（承応2～3年）江戸の飲料水供給のために作られた上水路です。

この上水は、江戸市中への飲料水の供給という本来の目的を果たす以外に、武蔵野台地の各地に分水され、飲料水・かんがい用水・水車の動力として武蔵野の開発に大きな役割を果たしました。

近年まで、この上水路はそのまま淀橋浄水場<sup>よどばし</sup>への導水路として使われていましたが、新宿副都心計画による淀橋浄水場の廃止に伴い、昭和40年以後小平監視所より下流については、水がとだえていました。

しかし、このたび東京都の清流復活事業により、野火止用水<sup>のびどめ</sup>に続き玉川上水にも清流がよみがえりました。

1986年8月 小金井市

次も掲示板の紹介である。

## 玉川上水

天正18年（1590）徳川家康が江戸に居城を定め、こえて慶長8年（1603）この地に幕府を開くにおよび、居住するものが増加して、飲料水に不足を生じたが、井の頭の池を水源とする神田上水等により、一応の解決を見た。

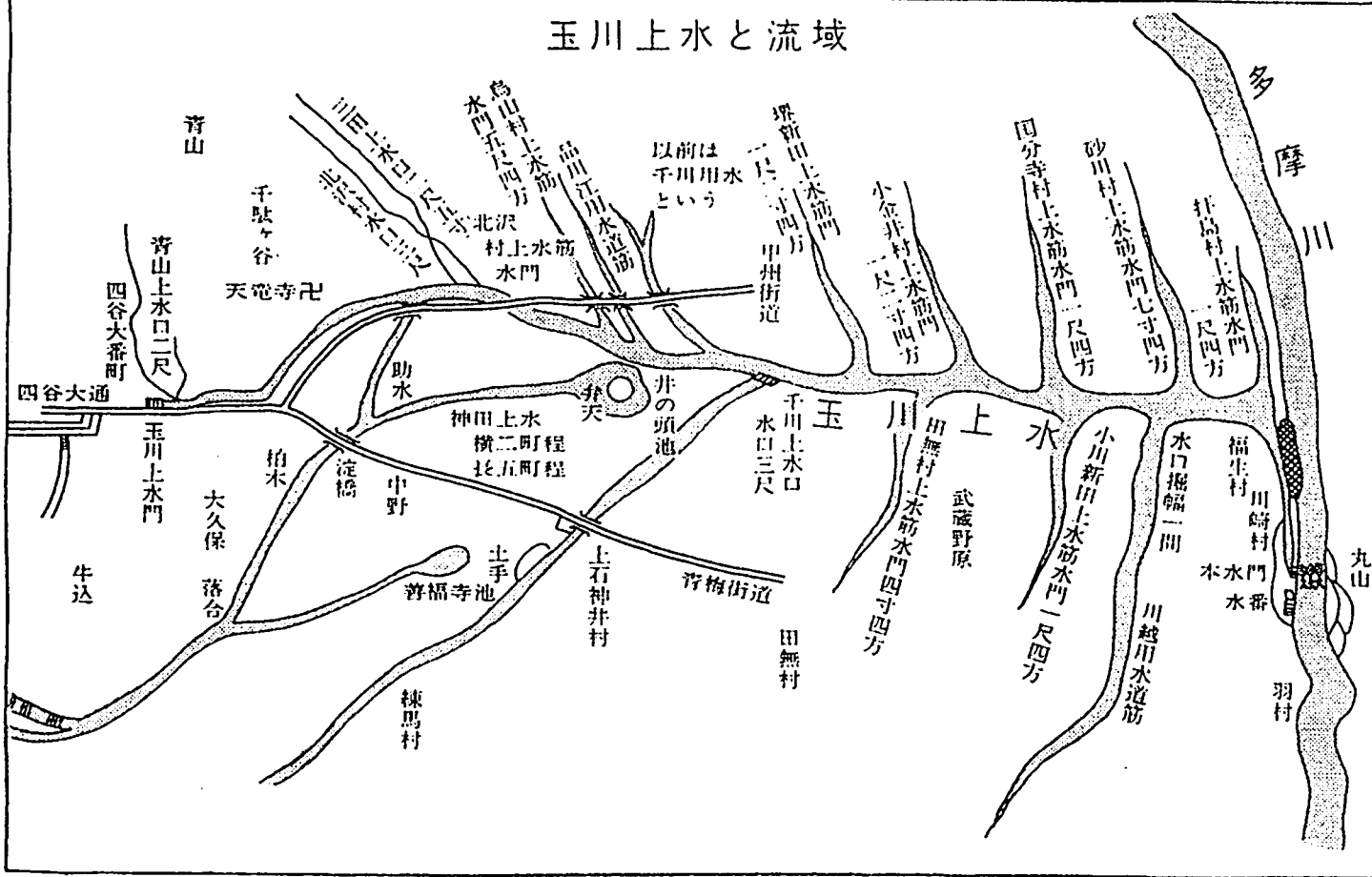
しかし、寛永12年(1635)三代将軍家光の諸大名参勤交代の制定からは、江戸の人口が急激に膨張し、再び飲料水に苦慮した。そこで幕府は、多摩川からの引水を計画した。承応2年(1653)幕府は、この願い出を許可して工事費、金七千五百両を与え、工事に着手させた。兄弟は、老中松平信綱の家臣、安松金右衛門の設計を取り入れて、同年4月に着工、同11月に羽村の取り入れ口から四谷大木戸まで、43キロの水路を開き、翌3年6月、江戸城内をはじめ、町々への給水を完成した。幕府は完成した水路5ヶ所に水番屋を設けて見回らせる一方、要所32ヶ所に高札を立てて、水を汚すものを取り締まった。玉川上水開さくの目的は、江戸市中へ飲料水の供給にあったが、水の乏しい武蔵野の開発にも寄与し、上水完成の翌年には野火止用水への分水、ついで明暦3年(1657)には小川、砂川、国分寺の3分水が許可された。その後、武蔵野の村々から相ついで分水の願い出があり、許可された数は、33ヶ所におよび、未墾の武蔵野の開拓をたすけ、今日の繁栄をまねいたのである。

東京小平ライオンズクラブ  
小平郷土研究会  
小平市教育委員会

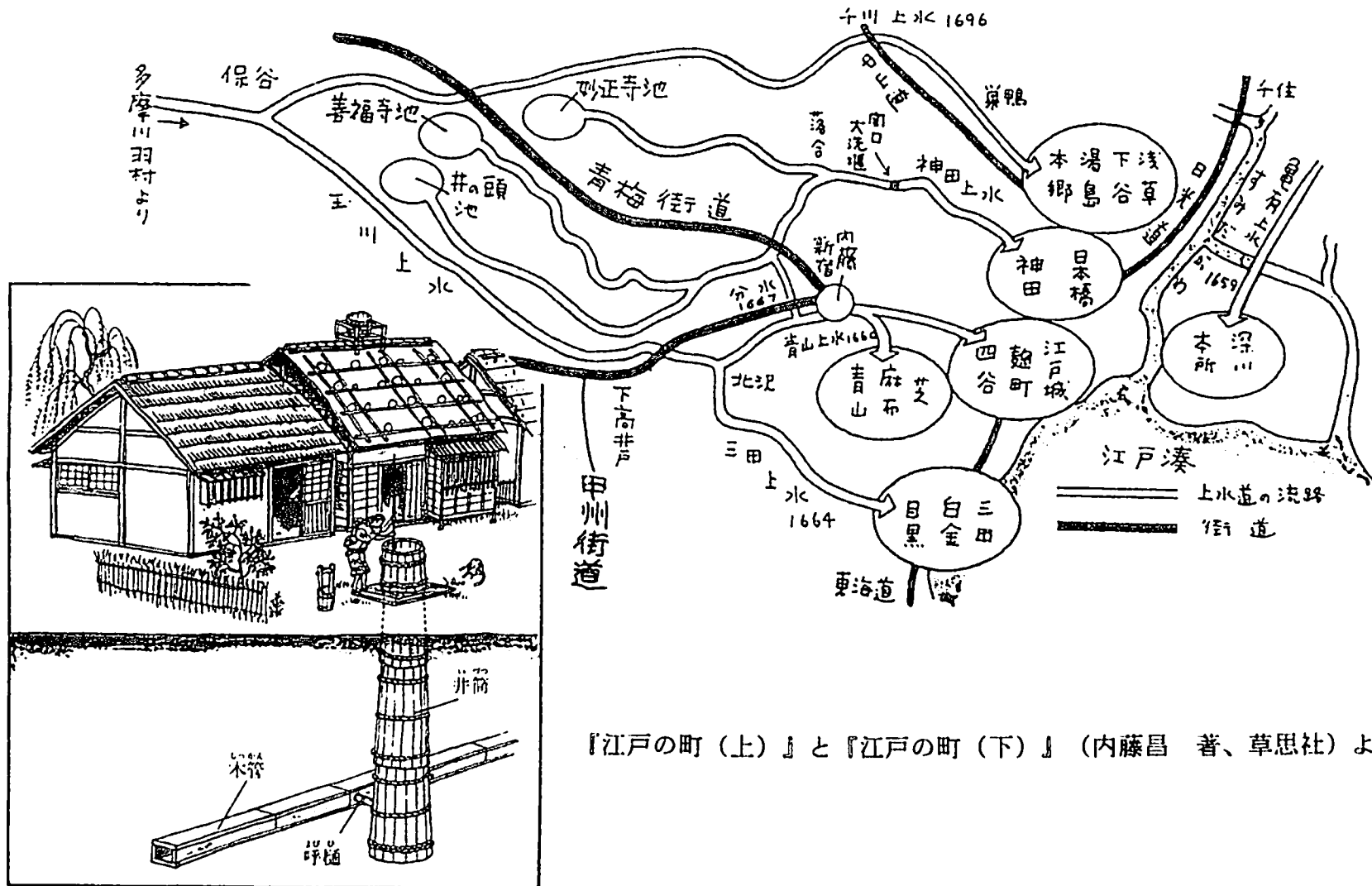
#### Tamagawa Water Supply

In Tensho 18 (1590) Ieyasu Tokugawa decided to set up his home castle in Edo, and in Keicho 8 (1603) he established a new BAKUFU (Shogunate) there. Thereafter the population of Edo increased and drinking water became in short supply. To solve this problem, the BAKUFU constructed the KANDA Water Supply, using the Inokashira pond as a source of water, in Kan-ei 12 (1635) Iemitsu, the third Shogun, enforced the system of SANKIN-KOTAI (under which feudal lords had to reside in Edo for certain

# 玉川上水と流域



東京ふる里文庫2『新宿の歴史』(名著出版)より



『江戸の町(上)』と『江戸の町(下)』(内藤昌 著、草思社)より

江戸市街への水の供給は、当初神田上水で間に合っていた。だが、しだいに江戸の拡大発展、人口増加に伴って神田上水のみでは飲料水が不足するに至った。

こうしたことから、幕府は承応二年（一六五三）、多摩川の水を引くこととし、多摩川沿岸に住む水理にくわしい庄右衛門、清右衛門のふたりによって工事が起こされた。幕府はふたりに工事費として六五〇〇両を与えた。両人は、現在の西多摩郡羽村町を水源として掘り始めたが、高井戸辺に至るまでに資金を使い果たし、さらに追加を願ったが、完成後に与えるとの意向に、所有していた町屋敷を売った一〇〇〇両をもって翌三年に完成させたという。

上水は、四谷大木戸（四谷三丁目交差点）まで武蔵野の中を約五〇キロを素堀で通した。四谷大木戸からは暗渠で、四谷門外まで石樋を埋めて引き、そこから先は木樋によって一部は城内へ、北は番町・富士見町・飯田町方面へ、南は平河町・永田町から虎の門外に至り、現在の中央区内ほぼ全域に給水した。

現在の内藤町八七番地、新宿区文化会館のある所は、当時水番小屋があった。ここでは給水量の調節をはかっていたのである。

明治以後、石樋と木樋は鉄道の敷設や建物の建築などの際掘り出されて、これらの遺物をわれわれは新宿区立中央図書館で見ることができる。

用材はおもに水に強いヒノキで、マツ、スギを用いることもある。凹形にくり抜き、同じ材質でふたをする。各管の連絡や方向転換には溜樋を使い、送られてくる水は各戸で井戸を設けて汲みあげたのである。

この配水は、明治二五年から三二年にかけて建設された淀橋浄水場（現在の西新宿二丁目にあった）が、近代式の給水事業を開始するまで利用されたのである。



## 江戸の町に上水道が発達した理由

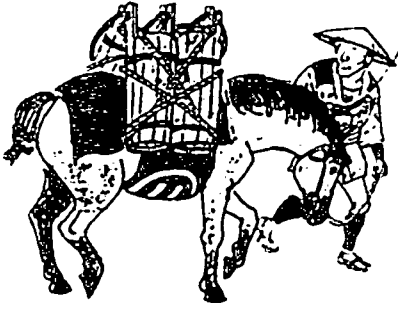
明治三十二年（一八九九年）、淀橋浄水場の完成により、送水は木樋（木製の管）から鉄管にかわり、上水路の約二百五十年にわたる役割は終わったのである。（筆者）

このように上水道が発達したのは、江戸が海辺に開発された都市であったため、地下水脈が深く、井戸をほるのにたいへんな費用（二〇〇両ほど）を要したからです。しかし、十八世紀に入ると、大坂より「あおり」という道具を使う井戸掘り技術が導入されて、わずかに三両二分でできるようになりました。このため、上水道にそれほど必要がなくなり、一七二二年（享保七年）になると、室鳩巢が、江戸に火事が多いのは、上水道をつく

りすぎたため、地中の水気を水道がうばってしまうからだとして、上水道の廃止をとなえました。ときに幕府は、財政たて直しの最中であつたので、この珍説は採用されて、神田・玉川上水を残し、亀有・青山・三田・千川上水は廃止されてしまうのです。

上水道が発達したのに反して、下水道は、つくられません。これは西洋の、たとえばパリの下水道のように衛生に対する科学的考えが進んでいなかったためでもあります。江戸周辺の農村との関係も見逃すことができません。広大な武蔵野台地をたがやして農作物を植えるのに、その下肥（肥料）として多量の糞尿が使われたのです。したがって、江戸市中の糞尿は高価に買いとられ、農村へ運

ばれました。運搬の方法は、掘り割りのある東部では肥船で、またこうした水運の便がない西部では、肥桶を馬にのせたり、人間が天秤で担いだりしております。その結果、豊かに栽培された砂川牛蒡・滝野川人参・小松菜・千住葱・目黒の筍などの野菜は、大江戸百数十万人の食生活をうるおしたのです。なお住民の出す塵芥(ごみ)は、町ごとに掃き溜めをもうけて集め、業者がまとめて埋め立て地(永代島)へ捨てておりました。



『江戸の町(下)』(内藤昌 著、草思社)より

## 玉川上水堤と桜

江戸時代、幕府の命令により玉川上水の堤にたくさんの桜が植樹されたので、大正13年(1924年)には小金井橋を中心に東西6キロ、約4千本の桜があって、国の名勝に指定されました。その壮観さも昭和の初期までで、樹齢の老化と社会の激変には耐えられず、衰退の一途をたどってしまいました。それでもわずかながらも桜の古木が残っており、他の草木を含め往時の玉川堤を偲ぶことができます。

(東京都都民生活局広報部都民資料室発行の『東京の名所・旧跡  
多摩散策コース』より)

## 玉川兄弟物語

次は、『江戸に水がやってきた――玉川兄弟ものがたり』（小沢長治・作、田中良・絵、岩崎書店発行）を紹介します。この本の「あとがき」に

「・・・玉川上水は、江戸時代のはじめから、三百年にわたって、江戸、東京の市民に、飲み水を供給してきました。この大事業をなしとげた、玉川兄弟については、基本的には、二つの資料しかありません。一つは、上水が完成してから約六十年後の1715年（正徳5年）に、玉川庄右衛門、清右衛門の子供が、幕府に提出した『上書』です。もう一つは、上水ができてから、約百五十年後の1803年（享和3年）に、八王子の千人同心小島文平が書いた、『玉川上水起元』と呼ばれるものであります。この中には、上水を作る時に、二度も失敗したという話や、松平伊豆守の家臣、安松金右衛門の功績が大きかったという説などが入っています。しかし、何分にも、百五十年後に書かれたものですから、そのすべてを、にわかには信ずることはできません。

この本では、庄右衛門の子供が主人公ですから、前者の資料に近い立場を取りました。玉川兄弟の出身地についても、定説はありません。しかし、玉川上水を作った人が、多摩川や、武蔵野を、よく知っていた人だという感じが深くなります。そこで、この本では、羽村の出身で、江戸で事業をやっていた人という説を取りました。・・・」

と、書かれています。

児童を対象にした絵本ですが、史実に基づいてわかりやすく書かれています。

## 2. 水道局小平監視所

多摩川左岸の羽村から取り入れられた多摩川の水は、玉川上水路を通過してこの小平監視所の沈砂池ちんさちに入ります。そしてここからは、暗渠で東村山浄水場に送られます。

実は、ここより下流の玉川上水は、多摩川の水ではないのです。他からの水なのです。すなわち、昭島市にある多摩川大橋そばの「多摩川上流処理場」から暗渠で送られてくる下水の処理水です。2次処理水を更に砂濾過したものが「多摩川上流処理場」から送られてくるのです。つまり、上流の玉川上水は多摩川の水ですが、下流の玉川上水は別のところから送られてきた処理水なのです。このことについては 5 で紹介します。

※小平監視所より上流の玉川上水散策もお勧めしたい。ここ玉川上水駅から西武立川駅の間です。上水から離れて、五日市街道のケヤキ並木や街道に面して見られる砂川新田の開発名主宅の門構えを見るのもおつなものです。

また、さらに玉川上水の取水口の羽村方面もよい。JR青梅線の羽村駅下車し、まいまいず井戸、羽村陣屋跡、玉川兄弟の銅像、玉川上水の並木道の散策があげられる。

## 3. 野火止用水

野火止用水は、松平伊豆守信綱まつだいらいずのかみのよつなが江戸の玉川上水を完成した功績により、上水を分水することを許され、家臣の安松金右衛門やすまつ きんえもんに命じて、水の不便な武蔵野台地を掘り、約24キロの水路を開かせたものである。これによって、野火止地方（現、埼玉県新座市にいざ市内）に移された農家は、豊富な飲料水が得られるようになったのです。

かつて、信綱は岩槻いわつきにある平林寺へいりんじをこの地に移すには、水利のないことを嘆いていました。そこで、玉川上水の工事を完成させた際に幕府から恩賞の沙汰があったのを機会に、それを辞退して、平林寺が使用する水として、玉川上水の水を関口から一升（取水口の大きさ）だけ引く許しを受けて、野火止用水を完成させたのです。

野火止用水が武蔵野の雑木林の中を通る当時の面影が平林寺周辺などに残っています。

野火止用水の本流は、この辺では新座市内の西堀地区から平林寺の裏山を經由して、東武東上線志木駅付近に流れ、さらに本流から西堀分岐点で分岐された支流（平林寺堀）が平林寺境内やその周辺に見られます。

#### 4. 野火止用水の清流復活

案内板には次のように記されている。

野火止用水は、今から約330年前の承応4年（1655年）に松平伊豆守信綱によって作られ、生活用水・かんがい用水として利用されてきました。

しかし、時代が進み、上水道の普及や昭和30年代後半からの急速な都市化等により、用水としての機能は失われ、野火止用水へ流れる水も、昭和48年から途絶えてしまいました。

このまま野火止用水を滅ぼしてはいけないと、地域住民の声が高まり、東京都は、昭和49年に、野火止用水を歴史環境保全地域に指定しました。

さらに、東京都は清流を復活させるため、下水の二次処理水を、野火止用水・玉川上水・千川上水に流す計画を立てました。そして、4年間の工

事のすえ、清流復活第1号として野火止用水に清流が甦りました。ここは、玉川上水から分岐して、野火止用水が始まる起点でもあり、導水管によって送られてきた水の圧力を抜く調整槽が建っている場所でもあります。

水はここから約2キロ先下流の放流口まで、道路の下に埋設された導水管の中を自然流下し、放流口からはじめて人の目に触れ、野火止野原用水路を流れることとなります。

#### 清流復活事業概要

- ・ 工事期間 昭和56年度～昭和59年度
- ・ 総事業費 約43億円
- ・ 導水管 東京都下水道局多摩川上流処理場（昭島市宮沢町）から、野火止用水放流口（東大和市向原4丁目、小平市栄町）まで圧送  
延長10.7㍓ 管径70㍓・50㍓
- ・ 施設 砂ろ過施設、導水ポンプ所、調整槽、その他
- ・ 放流量 2万t/日 程度
- ・ 放流水質 BOD 8PPM以下  
(下水の二次処理水をさらに砂ろ過したもの)

東京都

### 5. 玉川上水（小平監視所下流）の清流復活

玉川上水は、昭和59年の野火止用水の清流復活に次いで、昭和61年8月に清流復活がなされました。「多摩川上流処理場」から送られてきた処理水は、野火止用水とそれに玉川上水へ流されるのである。

次に案内板を紹介する。



## 清流復活事業とは

東京都では、都民が水辺に親しむことができるように、せせらぎの水音が聞こえ、周辺の緑とともに目で楽しむことができるような清流復活をめざしています。この玉川上水に流れている清流は、多摩川上流処理場の処理水をさらに砂ろ過したものを利用しています。

東京都環境保全局自然保護部

## 6. <sup>じょうすい</sup>上水<sup>こばし</sup>小橋

人口の岩山から流れ落ちる水は、「多摩川上流処理場」で処理された水である。飲料水の一步手前の水である。ここは風情があってよい。

※野火止用水の散策もお進め品である。なお、小平市では市内一周緑道（野火止用水と狭山境公園緑道と玉川上水）20.85 ㌾の遊歩道が完備している。

## 7. 小川橋そば石橋供養塔

### ア. 小川橋

砂川村の商人丸山平七が荷を運ぶ為にかけたもので、この為、小平では『市』が栄えなかったと言う。この辺は玉川上水が最も深いところで、川底まで約6メートルある。（案内板より）

### イ. 石橋供養塔

天保13年（1842年）の造立（願主は、小川村中・砂川村中）で、高さ2メートル、上部に東西南北の方位を刻み道標を兼ねている。また、小川用水と田無用水の分水口もこの真下にある。（案内板より）

<p>西 天保十三寅年六月</p> <p>左ハ</p> <p>山口 所沢</p> <p>ミチ</p>	<p>南 石橋供養塔</p> <p>願主 人話世</p>	<p>東 武州多摩郡小川村</p> <p>世 小川 右ハ</p> <p>話 村中</p> <p>人 砂川</p> <p>江戸ミチ</p>
--	------------------------------	--

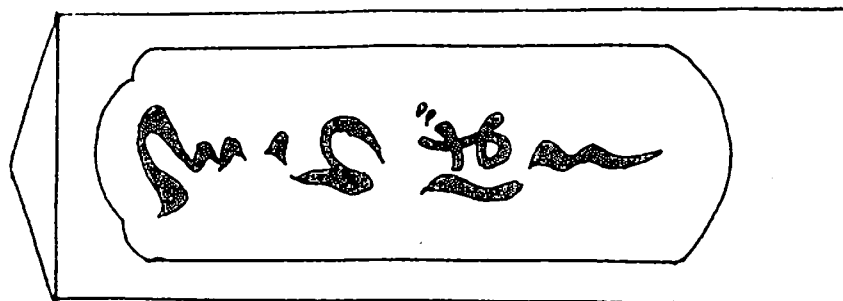
※裏面には『石工 引口町 藤治郎』と刻まれている。  
 ※正面下部には、世話人と願主の名前が刻まれている。

### 8. 『小平』の地名のいわれ

小平の開拓は、今から300余年前に始まりました。江戸に幕府が開かれてから、江戸を中心として人々の往来や人口も増加し、それにともない水に対する需要も増え、市内南部を流れる玉川上水が、江戸市民のため開削されました。しかし、江戸市中に比べ小平を含む武蔵野一帯は、住む人もなく荒涼とし、旅人などの困難さは大変なものでした。こうした中で、玉川上水をもとに明暦3年（1657）小川九郎兵衛によって小平の西部地区が開拓され、小川・大沼田・野中・鈴木・回田の各新田が次々に開拓されました。そして、明治22年（1889）の市町村制施行により『小平村』となりました。

『小平』という地名は、一帯が月の入るべき山もない『平』な土地で、最初の開拓者が小川九郎兵衛であったことから、小川の『小』と『平』をあわせて、『小平』としたという古老の話が伝わっているという。

(『東京の名所・旧跡 多摩散策コース』より)



『寺橋』の石碑

## 9. 旧小川水衛所

これよりさらに下流に、旧境水衛所がある。境浄水場の手前で、千川上水が玉川上水より分岐する地点である。さらに下流の井の頭公園先、浅間橋手前には旧久我山水衛所がある。

※下流の小金井公園・武蔵野郷土館あたりの玉川上水から、東京都水道局境浄水場・国木田独歩の碑のあるあたりまでの散策もよい。小金井公園開園当時植えられた約1,500本の桜は大木に成長し、公園及びその付近の玉川上水堤の桜は都内有数の桜の名所となっている。今年は桜の開花が早いそうで、今、花見で賑わってきていることであろう。

## 1 1 . 平櫛田中館

- ◇禅宗（臨濟宗）の僧侶、禾山和尚と近代日本美術の救世主で日本美術院の創立者、岡倉天心の二人の影響を強く受ける。
- ◇写実的な表現と寄木極彩色古法の復興（本間正義氏による）
- ◇書『いまやらねばいつできる わしがやらねばだれがやる』を出身地岡山県井原市内の小学校等に寄付されているが、大正11年から昭和45年まで自宅があった上野桜木町近くの谷中小学校等にも寄付されている。
- ◇昭和41年に東京芸術大学内に田中記念室を設置している。
- ◇昭和54年、小平市自宅にて107才で逝去。
- ◇田中館は、田中翁98才のときに建てられたため、『九十八叟院』とも呼ばれる。
- ◇書 不老『六十・七十は鼻たれ小僧、男ざかりは百から百から。』

小平市平櫛田中館は、日本近代木彫界の巨匠、彫刻家平櫛田中翁（小平市名誉市民・文化勲章受章者）の終えんの館を保存し、広く市民の皆さんに公開するため設置されました。

ここで、翁の生前の生活に思いやり、親しんでいたくとともに、作品、庭園を鑑賞していただきたいと考えています。そして、館（＝生活）、美術品、庭園を一体として鑑賞する中で、平櫛田中芸術の真髄を味わっていただきたいと願っています。

『小平市平櫛田中館』パンフレットより



先生近影（自宅の庭にて）

田中翁は、少年期に木彫に興味を覚え、明治26年5月中谷省古に弟子入りして木彫の手ほどきを受けて以来、百歳をこえてからも現役の彫刻家として活躍されました。

その芸術の特徴は、優れた写実力と深い精神性、そして彩色にあるといえましょう。

初期の作品は、「無英々々」「姉ごころ」などの日常身辺の人物をテーマとした身近彫刻で、作者の人間性が感じられます。

次の仏教的テーマを題材とした時期は、臨濟禪の木山老師の影響を強く受けて、「活人箭」「法堂二笑」「犇牛」など、翁の内面を表出した精神的な作品を数多く制作しています。

この時期に翁は、もうひとり人間形成のうえで大きな影響を受けた人に出会いました。それは、近代日本美術界の救世主で日本美術院の創立者岡倉天心でした。彫刻のうちに「理想」を表現するという田中芸術の真髄を、この出会いで翁は体得したのです。

仏教的テーマの彫刻期から後、日本美術院研究所で3年間彫塑研究に没頭しますが、ここでの習練がやがて、個性的な、理想を刻み込んだ数々の名作「烏有先生」「転生」「五浦釣人」「鶴魁」などの誕生へとつながるのです。

そして、これらの時期を経て、田中芸術のすべてを結集し、20年の歳月をかけて完成したのが生涯の大作「鏡獅子」です。幾多の苦心と曲折を経て出来上がった、像高2メートルの彩色を施したこの作品は、現在国立劇場正面ホールに展示されています。

## 『小平市平橋田中館』パンフレットより

- 1872年(明治5) 6月、岡山県井原市に生まれる。本名、田中偉太郎。
- 1882年(明治15) 平橋家の養子となる。
- 1893年(明治26) 中谷省古に弟子入りし、木彫の手ほどきを受ける。
- 1894年(明治27) 胸部疾患のため郷里に戻り静養。
- 1895年(明治28) 奈良に2年近く滞在して古仏を見て歩く。観音像を一体制作。
- 1897年(明治30) 11月、上京。
- 1898年(明治31) 7月、谷中の長安寺に寄宿。西山禾山の臨濟鉢の提唱を聞き、影響を受ける。
- 1901年(明治34) 日本美術協会美術展に「童子歌君」代」を出品。銀牌を受賞。
- 1907年(明治40) 文部省第1回美術展(文展)に「姉ごころ」(石膏)入選。
- 1908年(明治41) 日本彫刻会第1回展に「活人箭」を出品、岡倉天心の推奨を受ける。
- 1910年(明治43) 日本彫刻会第2回展に「法堂二笑」「忘化大師」「竹取翁」を出品。
- 1914年(大正3) 日本美術院再興記念展覧会に「禾山笑」「横笛堂」「月明」「樹に倚りて」を出品、会期半ば同人に推挙される。
- 1922年(大正11) 横山大観、下村観山、本村武山の尽力で、東京市下谷区上野桜木町に住宅を建てる。以後昭和45年まで住む。
- 1930年(昭和5) 日本美術院の経営者に加わる。第17回院展に「五浦釣人」出品。
- 1937年(昭和12) 帝国芸術院会員となる。
- 1942年(昭和17) 第29回院展に「鶴魁」を出品。
- 1944年(昭和19) 東京美術学校教授に任命。帝室技芸員に任命。
- 1949年(昭和24) 東京芸術大学教授となる。
- 1951年(昭和26) 紺綬褒章を受ける。
- 1954年(昭和29) 文化功労者として顕彰される。
- 1958年(昭和33) 財団法人日本美術院の理事になる。第43回院展に「鏡獅子」出品、試作発表以来20年を経る。岡山県井原市名誉市民となる。
- 1961年(昭和36) 東京都台東区名誉区民の称号を贈られる。
- 1962年(昭和37) 文化勲章を受章。
- 1965年(昭和40) 東京芸術大学名誉教授となる。
- 1966年(昭和41) 東京芸術大学内に田中記念室を設置、公開。
- 1970年(昭和45) 東京都小平市学園西町に転居。
- 1971年(昭和46) 百寿を記念し「平橋田中賞」設定。
- 1972年(昭和47) 小平市名誉市民に推戴される。
- 1973年(昭和48) 岡山県井原市に田中美術館開館。
- 1976年(昭和51) 岡山県井原市に平橋田中文庫開設。
- 1979年(昭和54) 12月30日午前1時52分、小平市自宅にて逝去。(107歳)

「鏡獅子」は戦前から戦後にかけて、先生の力をふりしぼった大作である。六代目菊五郎のけんらんたる歌舞伎十八番で、獅子が花道から舞台に出てきて、いったんあとずさりて揚げ幕の中にはいる。相当すさまじい勢いで入るので、中に人がいてうけとめ一息いれ、それから再び花道に出てきて、トンととまった瞬間の、力のはりつめた緊張した姿をとらえたものである。これは豪華な衣裳をまとった彩色像に完成されるが、この試作像として、同じポーズの裸体像が作られた。六代目は九代目團十郎から、けいこをつけてもらう時は、すべて裸で習い、弟子達にも裸で教えたという。そのきたえぬいた見事を体格の六代目を活写してこの像はあますところがなかった。平櫛先生は六代目の死後、新しくこれをもう一体作って未亡人におくられた。その時彩色を頼んだ人と意見があわなかった。はじめの像は白塗りで、今度のは肉色であった。先生は当時国立近代美術館の今泉篤男次長に意見を求められ、私もお伴してお花茶屋のアトリエにお邪魔した。像を拝見しながら、問題の彩色の具合の是非ということより、私は先生が像の着色ということに異常に強い関心をもっておられることに興味を覚えた。

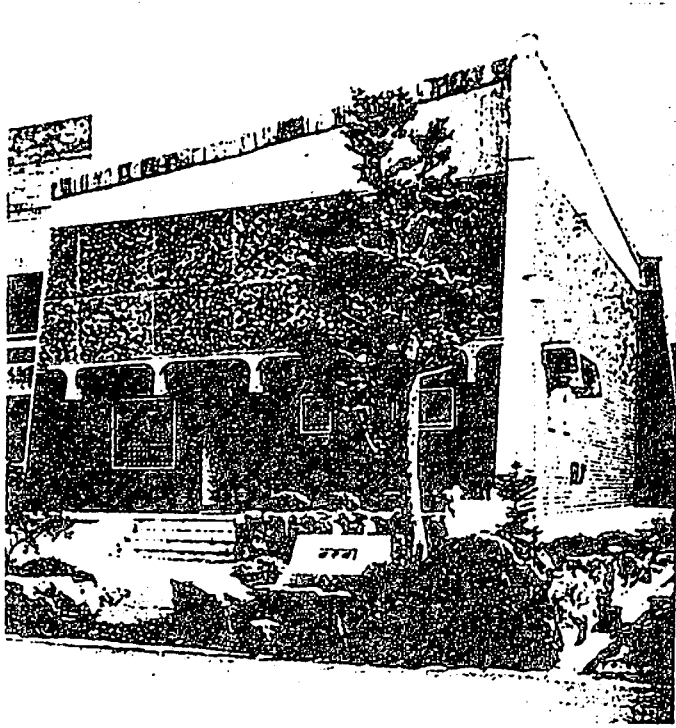
そういえばこの像の顔にくまどりをいれたのは先生の意見である。さすがの六代目もこれには驚いて、稽古の時にはくまどりをつけないので困りますといったが、これがあってこそ面白いので、つけなければならぬという頑固問答の末、六代目も納得したのだというふうに聞いている。

彫刻の彩色のことについて、ことさらに精しくふれたのは、先生がこれに特別な考えをもっておられたのではないかということからである。今日でこそ彫刻に彩色することは珍らしくなくなったが、戦前、彫刻彩色は邪道だと一般に思われていた。彫刻のもつボリュームとか、素材に即した実在的な感銘をそこなうからである。先生がこんな中であえて木彫に彩色をはじめられたのは、伝統木彫の在り方を現代に導入してこようと強く意図されたからに外ならない。

(本間正義氏による『平櫛田中先生の芸術』より)

『百翁 平櫛田中作品集』(井原市の田中館発行)より





井原市田中館

『百翁 平櫛田中作品集』（井原市の田中館発行）より



小平市自宅

大正二年、平櫛先生は「尋牛」という作品を作った。これは牛を尋ねて山へわけいり、ようやく足あとをみつけ、次いでしつぽをみつけ、だんだん見えてきて、遂につかまえ、馴らして帰るといふ禪の悟りの要諦を示したものである。これは死ぬ直前の岡倉天心氏がみて、非常にほめてくれた作品である。

これには一生、牛をたずねて、たずねあぐねる彫刻家、平櫛田中先生そのものの行路をあらわす意味も含まれていた。